岡山県立短期大学紀要　32巻1号　十一～二十頁（1987）

日本における比較教育学の発達に関する研究

――先史研究――

石井　均

はじめに

かつて、ノアとエクスタインは、比較教育学の発達段階を、①旅行記、②教育借用、③国際協調、④要因分析、⑤社会科学的説明の各段階に分けた。(1) その中で、比較教育学の視点をさぐる上で重要なものの一つに、比較教育学先史研究をあげている。また、シュナイダー、フレーザー、ブリックマン等の比較教育学者も先史研究の重要性を指摘している。しかし、これらの「先史」研究は、いみじくもフレーザーとブリックマンが述べているように、「われわれのほとんどが、東洋の資料よりはむしろ西洋の資料により親しんでいる(2)」とし、主として西欧における文献研究に限定されている。そこで、西洋の資料よりはむしろ東洋の資料により親しんでいる我々は、以前に日本の比較教育学発達史についての論文を発表してきた。(3)

ただ、我々の研究は、日本の江戸時代以降の比較教育学の発達に重点を置き、それ以前については十分な考察がなされていない。したがって本稿では、従来考察のできなかった日本の古代より鎌倉時代にまで限定した比較教育学先史を扱っている。鎌倉時代までに限定したのは、その頃中国で宋が滅び、元帝国が成立するに及んで一時日本と中国との国交が絶えることと、また、この時代までは中国、朝鮮などから漢籍による海外教育文化事情の摂取にほぼ限られていたことによるものである。室町時代、特に後期になると、日本では近隣諸国との接触の他に、西洋世界との交流が行われ、その文化接触の度合が飛躍的に高まるからである。

古来、わが国はその特殊な地理的・社会的・文化的環境により、海外教育文化事情の摂取については大きな制約を受けてきた。政府間交渉でさえ、命がけで海を渡らざるを得なかったが、それでも数多くの先達が渡海し、また逆に海外からもあまたの渡来人が、わが国に文化をもたらしてきた。こうした苦難の対外交流の中で、ある者は直接に、またある者は間接に海外文化をもたらし、その中に断片的ではあるが教育・文化に関する事情が含まれていたのである。もちろん、それらのほとんどは漢籍によるものであり、その漢籍の成立年代に拘らず、時代を前後しながらも徐々に、しかし着実にわが国にもたらされてきた。すなわち、極東文化の「吹溜り」日本は、大陸から絶えずさまざまの文化を受容してきたのであった。

一、漢籍による海外教育文化事情の摂取

(一) 中国僧の西域・天竺紀行

古来、東洋においても、各地域を旅行して記録を残し、その中に宗教、学術、教育に関する記述を残した者もある。東洋においては、それらの叙述は特に仏教に関するものが多い。これらは、仏教東伝以降、多くの求法僧が仏典を求めるための旅行記の中に多くみられるのである。

今日、記録に残された最古の西域旅行記は、まず『法顕伝』であると言ってよかろう。法顕は、三九九年長安を出発し、敦煌を経てパミールを越え、インドに入りパータリプトラの天王寺に三年間滞在し、四一二年海路から中国へ到着した。この十四年間の歴訪記録が『法顕伝』として残されているのである。(4)

法顕は、敦煌から大砂漠を渡り、鄯善国に到りさらに西方に進んでいるが、この間の見聞を次のように叙述している。

「その国王は仏法を奉じ、〔国内には〕およそ四千余人の僧がおり、すべて小乗学である。諸国の俗人と僧侶はことごとくインドの仏法を行なっているが、〔内容は〕精粗さまざまである。この国から西方の通過した諸国は、大体みなこのような状態であった。ただ国々の言葉は同じでないが、出家の人は、みなインドの言語を習っている。(5)」

法顕はその後、マガダ国のパータリプトラに到っており、ここでは次のような

記録を残している。

「アショーカ王塔の付近に摩訶衍僧伽藍が造られ、はなはだ美〈厳麗〉しい。また小乗の寺もあり、ここにあわせて六、七百人の衆僧がいる。〔衆僧たちの〕威儀秩序は観るべきものがある。四方の高徳の沙門や学問の人で、〔仏法の〕奥義、学理を求めようと欲する人は、みなこの寺に来る。〔かつての〕バラモンの師、文殊師利という人もまたこの僧伽藍に住み、国内の大徳沙門、もろもろの大乗の比丘たちも皆ひとしく尊敬している。(6)」

仏教即学問の時代において、僧侶の生活や学問の様子を、法顕は到るところで見聞し、『法顕伝』の随所に書き記しているのである。

五世紀の記録である『法顕伝』ののち、六世紀の西域に関する貴重な資料として『宋雲行紀』をあげることができる。『宋雲行紀』は東魏の楊衒之撰『洛陽伽藍記』巻五に付載されているものであり、五四三年以後に書きあげられた書である。(7) 宋雲は僧侶ではなく、官人であり、当時中国にとって強敵であったエフタルや周辺諸国の国情偵察のために派遣されたのであって、『宋雲行記』は単なる旅行メモではなく、偵察報告書の性格をもつものであった。(8)

五一八年に洛陽を出発した宋雲と恵生らは、翌年エフタルに至り、彼らがフェルトで家を作り、水や草を追って移動し、「文字も礼教もない(9)」ことを記述している。また、ウジャーナ国の記述には、

「城の北に陀羅寺があり、仏事はもっとも多い。浮図は高く大きく、僧房は〔たくさん〕立並んでいる。〔寺内には〕金像が六千体もとりまいている。王の年常大会は、みなこの寺で行なわれ、国内のすべての沙門が雲のように集まる。宋雲と恵生はこの寺の僧侶たちの戒行の精苦ぶりをみて、その模範とすべきを知り、とくに恭敬の念をはらった。(10)」

とあり、僧侶の養成やその修行の様子がうかがえるのである。

七世紀になると、僧玄奘が天竺への求法旅行に出立する。玄奘（六〇〇―六六四年）は有名な『西遊記』の三蔵法師のモデルであり、インドの仏典を中国にもたらしそれらを漢訳したことでも知られている。玄奘は、六二九年に出発し、六四五年に長安に帰っており、この間の旅行の様子は『大唐西域記』や、慧立・惓綜著『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』に詳しい。

玄奘の書き記した『大唐西域記』巻第二では、インドの言語・文字・教育に触れ次のように述べている。

「〔子供の〕蒙を開き指導をするには、まず〔悉曇〕十二章からはじめ、七歳後ようやく五明の大論を授ける。〔五明とは〕一に声明という。語を釈き字を訓み、目を詮かにし区別を分類する。二に工巧明。技術・工芸・陰陽・暦数である。三に医方明。禁呪をし邪悪をふせぎ、薬物・治療法・針・灸の術である。四に因明という。正邪を考え定め、真偽をきわめしらべる。五に内明という。五乗の因果の妙理を研究する。(11)」

また同じく巻第九には、有名なナーランダ寺の教学について触れている。

「僧徒は数千人おり、みな才能高く学殖ある人々である。徳は当代に重んぜられ名声を外国にまで馳せている人は、数百人以上もいる。戒行も清潔に守則作法も純粋である。僧には厳しい規制があり、人々はみな固く守っているので、印度の諸国は模範として仰いでいる。教義を研究するに日を尽くしてもなお足りず、朝に夕にお互いに警め合い、若いものも年長者も互いに助け合っている。もし三蔵の幽玄な趣旨を口にしないようなものがあれば、自らが自らを恥じることになる。かかる次第で異境の学者で声誉を馳せたいものは、悉くここへ来て疑義を質して始めて名声を讃えられるのである。それでここに留学したという虚偽の肩書で諸方に遊ぶとしても、何処でも丁重に礼遇されるのである。外国・異境の人でここの論義の列に入ろうとするものは、詰問され屈して本国に帰るものが多く、学殖が古今に深く達している人で始めて入門し得るのである。かくして留学してきた後進の人で学芸に詳しい人でも、退散するものはもちろん十中に七、八もある。残りの二、三の博識の人も、僧衆中で次々と問い詰められて、その鋒先を挫かれその名声を失墜しないものはない。(12)」

『大唐西域記』は、さすがに超一級の旅行記だけに、この他にも随所に仏教教育について触れられており、当時の西域・天竺の教育事情を知るためには実に興味深いものである。

同じく七世紀の求法僧義浄もこのナーランダ寺を訪れている。義浄（六三五―七一三年）は海路より天竺をめざし、六七一年から六八一年に到る間の旅行記は、『南海寄帰内法伝』として今日まで残されている。同書の巻四「讃詠之礼」には、

当時のナーランダ寺が次のように書き記されている。

「那爛陀寺の如きに至りては、人衆殷繁にして僧徒の数は三千を出ずれば造次に群集を為し難し。寺は八院あり、房は三百あり。但々時に随って当処にて自から礼誦を為す可し。(13)」

また同書巻四「西方学法」では、当時の学問一般について詳細に触れられていて、実に興味深いものがある。(14)

ところで、このような旅行記等は、そのもたらされ方はどうであれ、いつしかわが国に伝え知らされている。たとえば、六五三年の遣唐使に随行した日本僧道照和上は、「ちょうど玄奘三蔵にであい、師として仕えて学業を受けた。三蔵はとくに道照を愛し、同じ部屋に住まわした(15)」（『続日本紀』文武天皇四年の条）とされている。道照のような入唐僧やその他の留学生などにより、わが国にはさまざまな経路で、天竺をはじめとする仏教的教育的知識がもたらされたに違いない。なお、後述する入宋僧栄西や同時代の僧侶たちの間では、これら「西域の方誌」すなわち天竺への求法高僧伝の類が多く読まれており、(16)特に、栄西は、二度目の入宋時にインド旅行に必要な『大唐西域記』を携行したと言われている。(17)

(二)　中国「古典」および「正史」

古代文明の花開いた中国では、学問も隆盛となり、漢の武帝の時代になると儒教が国教となっている。「四書五経」は重んぜられ、それ自体が大きな学問体系でありかつまた教育思想でもある。これらの書物の中には、中国（人）の教育に関する記述が含まれていることは周知の事実である。(18)

このような漢籍は別としても、中国の教育文化に関する記述を残す書物もきわめて多い。特に、中国歴代王朝の「正史」がそうであり、なかでも有名なものとしてまず、司馬遷（BC一四五－BC八五年頃）の手になる『史記』（BC九一年成立）の中の記述に触れておきたい。この『史記』「儒林列伝」には次のように述べられている。

「……秦の始皇帝にいたるまでは、天下の諸国は並争して戦国の世をくりひろげ、儒術はしりぞけられてしまった。しかし、斉・魯の間だけは、学問する者があとを絶たなかった。斉の威王・宣王の時代においては孟子・荀卿（じゅんけい）の系統がみな孔子の遺業をついでこれを潤色し、学問をもって一世に顕われた。秦の末世にいたると、詩・書を焚（や）き儒術の士を坑（あなうめ）にしたので、そのために六芸（六経）は、欠けて伝わらなくなった。(19)」

「儒林列伝」は、その名称が示す如く、多くの儒家の事跡をあげており、学問の様子を詳しく述べている。また同書の「書」では、礼、楽、律、暦、天文等の当時の学問の記述がみられ、(20)その他にも随所に学問・教育等に関する叙述が散見される。

同様に、班固（三二－九二年）の『漢書』（八二年成立）にも、「芸文」「董仲舒伝」「司馬遷伝」「儒林伝」などの個所その他多くの教育・文化的記述がみられ、(21)さらに六朝宋の范曄（はんよう）の『後漢書』（五世紀前半編纂）その他の「正史」にも、中国の学問・教育に関する記述がみられる。しかし、『史記』をはじめとするその後の中国歴代王朝の「正史」の中の中国の教育・学術に関する叙述はあまりにも有名であり、かつ膨大なために、ここでは『史記』の「儒林列伝」の一部のみにとどめておいた。

また、中国歴代王朝の「正史」は、中国の周辺諸国の宗教、学術、教育等について、断片的にではあるが記録している。もちろん、これらの記事は、各王朝と周辺諸国との親疎の関係、その関心の持ち方の度合いによって描写には精粗の差がでてきていることは否めない。いわゆる「正史」東夷伝・北狄伝等がそれである。(22)

たとえば、『隋書』（六三六年完）「列伝」には、遼東地方の諸国の文化、教育について次のように述べられている。

「〔この地方の人たちは〕儒教の経典を学ぶことが好きで、文学や史書を愛読する。〔隋の〕都に遊学するものが、その往来の道すがら、ときには死亡して帰らない者もいる。(23)」

『南斉書』（五〇二－五一九年）「高麗国伝」では、この国の人々は「五経を読んで(24)」おり、『周書』（六二八年着手）「高麗伝」でも、「書籍には、五経、三史、『三国史』、『晋陽秋』がある(25)」と述べられている。また、『後漢書』「韓伝」には、「〔彼らは〕跪拝〔の礼〕を知らないし、長幼の序や男女の別（儒教の礼）がない(26)」と述べられており、同様のことは『三国志』・（三世紀後半編纂）「韓伝」、『晋書』（六四四年完）「馬韓伝」にも述べられている。(27)

さらに、『周書』「百済伝」には、次のような記録が残されている。

「……あわせて古典や歴史書を好んでいる。なかでも秀れたものは、かなり上手に文章をつくり、また陰陽・五行〔の説〕を理解している。……また医薬・卜筮・占相の術にも詳しい。……〔仏教の〕僧・尼や寺塔は大変多いが、〔道教の〕道士はいない。(28)」

同様の記述は、『隋書』「百済伝」にも記載されている。(29)

他方、「北狄」はさすがに歴代中国王朝を悩ましてきただけに、戦闘、外交に関する記述が多くみられる。しかし、その中でもまれに『宋書』（四八八年完）「芮芮伝」のように次のような記録を残している場合もある。

「……文書をしらず、木を刻んで事を記したが、その後、漸く文字を知るようになり、現今では頗る学者がいる。(30)」

また、『魏書』（五五一ー五五四年編纂）「高車伝」には、倍侯利と言う武勇にすぐれ敵陣の攻略に非凡な首長のことをとりあげており、「北方の人はおそれ、乳呑児の泣き叫ぶものに、『倍侯利が来た』とさとすとすぐさま泣き止んだ(31)」と言われたとの叙述が残されている。

以上のような中国歴代王朝の正史などは、様々な経路を経てわが国にもたらされており、中国やその周辺諸国の文化・教育が、断片的にせよ徐々にわが国で知られるようになってきたのである。

二、国際交流と海外教育事情摂取

(一) 渡来帰化人の役割

極東に位置するわが国は、早くから強大な中央集権国家を成立させた古代中国に比べれば、はるかに遅れた後進国であった。わが国では、漢の時代に「奴国」が北九州に登場し、『三国志』「魏志倭人伝」では「邪馬台国」を知るのみであり、五ー六世紀になってはじめて統一国家らしき形態が整えられたのであった。したがって、後進国「倭国」は、中国大陸のすぐれた文物を朝鮮半島を経由して受容につとめていた。

『北史』（六五九年完）「倭国伝」では、もともと「倭人」の間には「文字はなく、ただ木に刻み目をつけたり、縄に結び目をつけたりして〔文字に代えて〕いたが、仏法を敬い、百済から仏教経典を求める〔に至って〕、初めて文字をもつようになった(32)」と記されている。ここに述べられているように、わが国には確かに文字はなく、すぐれた古代朝鮮の文化をもつ渡来帰化人等が儒教や仏教とともに、文字をもたらしたことは周知のとおりである。

わが国に一応の集権体制ができ上った頃、文化の伝達・受容については朝鮮半島、特に百済との関係が深かった。百済からは多くの人々が渡来し、わが国に定住するようになり、彼らが各種の知識をもたらしているのである。このことはいわゆる「記紀」の記事にもみられるとおりである。もちろん、「記紀」の記述は、そのままうのみにはできない作為がみられるが、それでも朝鮮半島、特に百済から各種各様の専門家が招かれており、彼らはわが国の文化水準の向上に大きな役割を果たしていることが読みとれるのである。

たとえば『日本書紀』によれば、六世紀前半の継体天皇七年条（異論が多く西歴年号不詳）には、「七年の夏六月に、百済……五経博士段楊爾を貢る(33)」とされ、同じく継体天皇十年条に、百済は「別に五経博士漢高安茂を貢りて、博士段楊爾に代へむと請ふ。請す依に代ふ(34)」との記述がみられる。

また、『日本書紀』欽明天皇十四年（西歴五五三年）条によれば、天皇は百済からの使者に対して、

「医博士・易博士・暦博士等、番に依りて上き下れ。今上件の色の人は、正に相代らむ年月に当れり。還使に付けて相代らしむべし。又卜書・暦本・種種の薬物、付送れ(35)」

と別勅を下している。すなわち、朝廷では、各博士らは百済より交代で来朝しており、その任期が来たので代りの者を派遣するようにと要請しているのである。これを受けて百済は、翌欽明十五年二月に次に述べる者を派遣してきているのである。

「五経博士王柳貴を、固徳馬丁安に代ふ。僧曇慧等九人を、僧道深等七人に代ふ。別に勅を奉りて、易博士施徳王道良・暦博士固徳王保孫・医博士奈率王有悛陀・採薬師施徳潘量豊・固徳丁有陀・楽人施徳三斤・季徳己麻次・季徳進奴・対徳進陀を貢る。皆請すに依りて代ふるなり。(36)」

このように、百済からは交代によって五経博士や僧侶たちが来朝しており、わ

が国に儒教や仏教をもたらしたことが知られている。もちろん、儒・仏に限らず医・薬・易・楽など文化一般が彼ら百済人によってもたらされており、中にはわが国に定住し代々その文化を教授した渡来帰化氏族も知られている。とりわけ、五三八年に公伝された仏教の功徳を説きつづけた招聘僧は、他の分野の専門家とともに、明治維新における「お雇い外国人教師」の役割に似ているが、文化の総体における比重は古代の方がはるかに大きなものであったと言ってよい。(37)

さて、仏教公伝をめぐるわが国の豪族間の争いは有名であるが、この場合崇仏派の中心であった蘇我氏はもとより、渡来帰化氏族の役割を無視することもできない。その蘇我氏の勢力を背景に登場した聖徳太子（五七四―六二二年）の時代になると、仏教は興隆し、積極化する対外関係とあいまって、中国に使者が送られることになる。

推古天皇十五（六〇七）年七月には、小野妹子が聖徳太子の命を受けて隋へ派遣されている。この時の有様は『隋書』「倭国伝」にも「……使者が言うには、海西の菩薩のように慈悲深い天子が、重ねて仏教を興隆されていると聞いた。故に使して朝拝し、かたがた僧侶数十人が来て仏法を学びたい(38)」と記述されている。この年の使節は、その国書が煬帝の怒りに触れて失敗しているが、翌年（六〇八年）には再び小野妹子らが国使として隋に遣わされている。

六〇八年の使節には、「学生倭漢直福因・奈羅訳語恵明・高向漢人玄理・新漢人大圀・学問僧新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人慧隠・新漢人広済」(39)らあわせて八人が同行した。彼らは、その名前からもわかるように渡来帰化人であって、多くの者は二十年から三十年に及ぶ留学生活を送っている。彼らは中国において隋が滅亡し唐にかわる激動の時代を経験し、そのもたらした知識はわが国に大きな影響を与えている。たとえば、僧旻（日文のこと）は周易を講義し、南淵請安は儒教を説き、中臣鎌足と中大兄皇子が請安の家に通う途中で蘇我氏打倒の謀をはかったという伝承はよく知られている。なお、僧旻と高向玄理は、大化改新の際に国博士（政治顧問）に任命されている。

(二)「倭人」留学生の役割

さて、舒明二（六三〇）年の第一次遣唐使から、天智八（六六九）年までに六次にわたる使節が唐に遣わされており、(40)とりわけ大化改新（六四五年）を境に「倭人」留学生が急激に増加しているのである。遣唐使に同行した多くの「倭人」留学生・僧のもたらしたすぐれた新知識は、わが国の各方面に大きな影響を与えたと言うことができる。その一例として大学寮の制度をとりあげてみたい。

大化改新後、中央集権的な国家体制を維持するために、多数の官僚が必要とされた。これらの官僚たちを組織的に養成するために、天智天皇（在位六六一―六七一年）は大津京に、天武天皇（在位六七三―六八六年）は藤原京に「大学寮」を設置したと伝えられている。しかし、確たる方針と制度のもとに官僚の養成が行われるようになったのは、文武天皇（在位六九七―七〇七年）治下の「大宝令」（七〇一年）により学制が定められ、都に大学寮が、地方に国学が設置されるようになってからである。(41)「大宝令」自体、わが国が律令国家を形成していく過程で、唐王朝の律令制を模倣したものであり、学制もその枠外に出るものではなかった。こうした意味において大宝令の学制は、いわば「教育借用」（近代国家におけるそれとは異なるが）の崩芽とみることができるのである。

大学寮は、儒教の古典を専攻する「明経」、同じく読み方について学ぶ「音」、「書」「算」の四科からなり、それぞれに博士・助博士、音博士・書博士・算博士という教官が配置されていた。大学寮で使われた教科書は、すでに中国で使用されているものばかりであった。たとえば、「明経」では、必修として『孝経』『論語』が、選択として『礼記』『春秋左氏伝』『毛詩』『周礼』『儀礼』『周易』『尚書』の九部があげられており、それぞれの注釈書も定められていた。(42)

こうしてみると、大学寮制度もその教育内容も全く中国のそれにならっており、わが国の中国文化に対する憧憬と模倣の様子が色濃く出ていると言えよう。ただし、大学寮および、中国の科挙の制に範をとった試験制度である「貢挙」は、いわゆる「蔭位制」によって当初の目的から大きく逸脱し、変貌をとげてゆき、やがて有名無実の制となっていくのである。

このような大学寮の改革と関連して、入唐留学生吉備真備と藤原清公をとりあげておきたい。

吉備真備（六九五―七七五年）は、十九年に及ぶ留学生活で、三史五経・名刑・算術・陰陽・暦道・天文・漏尅・漢音・書道・秘術・雑占の各学問を修め、帰国後、大学助となっている。彼は大学寮で学生四百人をして「五経・三史・明法

・算術・音韻・籀篆等の六道(43)」を学ばしめている。とりわけ従来の大学教科にはなかった三史をも教科書として採用したと言われており、その新知識は大学寮で十分に披瀝され、わが国の文化発展に多大の貢献をなしたことは言うまでもない。(44)

また藤原清公は帰日した八〇五年からしばらくして、大学寮の構内に「文章院」を設置し、これに「直曹」を付設して貧学生の寄宿舎とした。(45) この文章院自体、唐の制度を導入したものであることは容易に想像できるのであるが、これがやがて和気氏、藤原氏、橘氏、在原氏等の別曹の原型となり、大学寮の衰退を早めることになるのである。

ところで、大宝二（七〇二）年の第七次遣唐使から、菅原道真の意見によって遣唐使が廃止される（八九四年）まで、八度にわたる遣唐使が派遣されている。その間、学問僧や留学生達が数多く同行し、今日にその名を残している者も多い。このことは中国側の歴史書にも記録されており、わが国の人々がいかに熱心に中国の文物を求めようとしたかがうかがえるのである。

たとえば『旧唐書』（九四五年編纂）「日本国伝」には、

「〔玄宗（在位七一二ー五五の）開元〔年間〕（七一三ー四一）の初に、再び〔日本国は〕使を遣わし来朝した。そして儒士について儒学の教えを受けたいと要請した。〔そこで玄宗は〕詔を〔下〕して、四門（庶人の教育の為の学校であるが、律令など実際的な傾向が強い）の助教の趙玄默に〔命じて〕鴻臚寺において〔彼らに〕教えさせた。それで〔日本の使節たちは趙〕玄默に幅の広い布を贈って束修の礼（弟子入に際し、師に贈る礼物の儀礼）としたが、〔その布には〕白亀元年調布と題〔書〕があった。……〔使者たちは皇帝からの〕賜物で書籍を買い船に乗って帰国した。(46)」

と記されている。また『新唐書』（一〇六〇年編纂）「日本伝」では、

「〔徳宗の〕貞元年間（七八五ー八〇四）の末年に、桓武という〔日本の〕王が使者を遣わして朝〔貢〕してきた。〔日本からの〕学生橘免（逸）勢、浮屠（僧）空海は、滞留して〔学〕業を修めることを願い、二十余年〔の歳月〕がたった。〔日本の〕使者高階真人がやってきて、免勢らと倶に帰国することを〔皇帝に〕奏請した。〔皇帝は〕詔してこれを許した。(47)」

とある。この記事の中で二十余年は二十余月の誤りであるが、『続日本紀』の記録などからもわかるように、日本からは次々とすぐれた中国の文物を求めて唐へ渡る者が続いていたのである。

なお、わが国の海外教育情報の増大に影響を与えた者は、単に留学生・僧のみではない。なかには、鑑真和上（六八八ー七八〇年）のような中国の高僧・名僧がわが国に文化を招来した役割も忘れてはならない。特に鑑真は、天台関係の信仰をもっていたため、これらに関する書物を多く招来しているのである。後述する最澄もこれらの教義に影響され、天台宗の礎を作ったのである。(48)

(三) 入唐求法僧の役割

平安時代の初期、遣唐使に随従して数多くの名僧が唐に渡り、唐の文化や教育について書き記している者がいる。これらの書物のうち、今日にまで伝えられているものとして、最澄、空海、円仁の著作をあげることができる。

まず、天台宗を広めた最澄（七六六ー八二二年）は、日本仏教史の上でも重要な人物であり、彼は唐代の寺院を見聞した上で、わが国に天台宗布の必要を念じ『山家学生式』をしたためている。この『山家学生式』の「天台法華宗年分度者回小向大式（四条式）」には、唐と日本との仏寺の違いを次のように述べている。

「およそ、仏寺の上座に大・小の二座をおく。一つには一向大乗寺。文殊師利菩薩をおき、上座とする。……二つには一向小乗寺。資頭廬和尚をおきこれを上座とする。三つには大小兼行寺。文殊と資頭廬と両の上座におき、小乗の布薩の日には文殊を上座とし、僧侶は小乗戒を受けた年順に坐し、大乗の布薩の日には文殊を上座とし、僧侶は大乗戒を受けた年順に坐す。このような坐りかたは日本ではまだ行なわれていない。(49)」

ここには日唐の仏教寺院の比較がなされており、この文章に代表されるように『山家学生式』等最澄の残した文章には、随所に彼我の仏寺の相異点が述べられているのである。

次に、空海（七七四ー八三五年）は八〇四年から八〇六年にかけて唐に滞在し、のち高野山で真言宗を広めた仏僧である。空海は単に中国の寺院の見聞のみならず、一般庶民に関する教育知識をもわが国にもたらしている。『続遍照発揮性霊集補闕抄』第十巻の「綜芸種智院式並序」に次のような記述がみられる。

「……或有人難日。国家広庠序。勤励諸芸。霹靂之下。蚊響何益。答。大唐城。坊々置閭塾。普教童稚。懸々開郷学。広導青衿。是故。才子満城。芸士盈国。今是華城。但有一大学。無有閭塾。是故。貧賤子弟。無所問津。遠坊好事。往還多疲。今建此一院普済童蒙。不亦善乎。(50)」

この内容は次のとおりである。すなわち、空海が綜芸種智院を建てようとしたとき、ある人が、すでに国では大学を建てているので、そんな学校を設けて一体何の役に立つのかたずねた。空海はこれに対して次のように答えている。唐では、すでに立派な大学があるけれども各坊毎に、閭塾といわれる学業を修める家または塾をそれぞれ設置し、子弟の教育を行っていた。さらに、地方には郷学があって、青年達の教育が行われている。だから才智のある人や六芸に達した人がたくさんいる。ところが、わが国の都平安京では、大学はあるが閭塾に相当するものはない。このため、わが国の貧しい子弟は学問を修めることができず、学問を好む遠くの者は住来に疲れる。したがって、ここに私塾を建てて学童を教えるのは有意義なことである。

空海は、中国の教育をこのように述べているのであるが、唐の都の制度をわが国に移入させようとした考え方は注目に値する。このような空海の考え方の中にも、いわば教育借用の崩芽がみられるのである。(51)

ささらに、遣唐使に随行し入唐した学問僧で忘れてならない者に慈覚大師円仁（七九四－八六四年）がいる。彼は、八三八－三九年の遣唐使最後の公式派遣に同行し、十年間にわたる日記を『入唐求法巡礼行記』として残している。この日記についてはライシャワー元駐日大使が英訳本その他を残しており、彼はマルコポーロの『東方見聞録』、玄奘の『大唐西域記』に比肩しうるものとしてとりあげている。(52)

もちろん、円仁の入唐の目的は求法にあるので、仏教関係の記述が多く目につき、中国の仏院の様子や僧侶の修行の様子などはこと細かに記録されている。たとえば、八三九年、文登県（山東半島）の赤山法花院に滞留していた円仁は、十一月十六日に始まった法華講経を次のように述べている。

「山院は起首「法花経」を講じ、来年正月十五日を限りて其の期と為す。十方の衆僧及び有縁の施主は皆来会して見る。就中聖琳和尚は是講経法主なり。更に論義二人あり、僧頓證、僧常寂なり。男女道俗は同に院裏〔内〕に集まる。白日（昼間）は聴講し、夜頭は礼懺す。聴経すること次第に及ぶ。僧等は其の数卌〔四十〕来人なり。其の講経、礼懺は皆新羅の風俗に拠る。但し黄昏〔夕方〕と寅朝〔早期〕との二時の礼懺は且く唐風に拠り、自余は並びに新羅の語音に依る……(53)」

円仁は帰朝後、比叡山を統率し師の伝教大師最澄の遺志を承けて天台宗を大成し、比叡山の基礎を築いた人物であった。日記の記述を通してわかるのは、法を求めてやまない堅固な道心であり、これがこの日記の基盤となっている。(54) したがって、中国の各寺院での僧の学究、修行の様子は詳細をきわめており、このような中国寺院の教育方針等は何らかの形で比叡山にもとり入れられたことであろう。

(四) 入宋僧の役割

鎌倉時代になると、次々と新しい仏教各派が生まれるが、その一つに禅宗をあげることができる。もともと禅宗はインドにおこり、達磨大師によって中国へもたらされ、唐代の興隆期を経て、宋代には全盛期を迎えていた。この禅宗を求めて栄西、道元らが次々と入宋し、禅文化を日本へともたらしたのであった。彼らの残した書物の中にも、また中国の禅寺の記述がみられるのである。

まず栄西（一一四一－一二一五年）は、二度入宋し『興禅護国論』や『出家大綱』などを著している。とりわけ『興禅護国論』下巻「禅宗支目門第八」には、禅の精神に基づく具体的な修行のあり方が述べられている。この部分は、主として『禅苑清規』『禅法要解』『禅宗興由』『宗鏡録』にこれを仰いでいるとされているが、(55) 自らの中国滞留の経験にも基づくものであることは疑いなかろう。

「第八、建立支目門とは、禅苑清規ならびに大国見行の式を按ずるに、十有り。

一に寺院。謂く、寺は大小異なりといへども、みな一様に祇園精舎の図を模す。四面に廊有りて脇門無く、只だ一門を開くのみ。しかして監門の人、薄暮にこれを閉ぢ、天明にこれを開く。……

五に行儀。謂く、僧は長斎節食、持戒梵行、悉く仏語に順ぜんのみ。一日一夜の式、左のごとし。

上證〈黄昏のときなり、諸僧、仏殿に詣りて焼香礼拝す〉。人定〈坐禅〉。

三更〈眠臥〉。四更〈眠臥〉。五更〈坐禅〉。卯時〈黄昏の作法のごとし〉。天明〈粥を食す〉。辰時〈読経・学問、長老陞座す〉。禺時〈坐禅〉。午時〈飯を食す〉。未時〈沐浴等のこと〉。晡時〈坐禅〉。酉時〈放参なり〉。(56)」

なお、同書の「大国説話門第九」にも、大国すなわちインド・中国の仏院についての見聞（著書によるものも含むが）が随所にみられる。これらからは、仏教の新しい一派である禅宗を日本に普及させようとする栄西の意気込みが感じられるのである。

次に、道元（一二〇〇－一二五三年）の思想を残した書物は数多くあるが、直接の自著として残されているのは『正法眼蔵』であり、弟子の孤雲懐奘が師の教えを筆録した『正法眼蔵随聞記』も有名である。これらの書物にも折りに触れて宋の国の学問や禅寺の様子が書き記されているのである。たとえば『正法眼蔵』「礼拝得髄」には、

「見在大宋国の寺院に、比丘尼の掛搭せるが、もし得法の声あれば、官家より尼寺の住持に補すべき詔をたまふには、即寺にて上堂す。住持以下衆僧、みな上参して、立地聴法するに、門話も比丘僧なり。これ古来の規矩なり。(57)」

と述べられている。また、『随聞記』には、各僧侶の禅寺での修業の様子が述べられている。

「又云、我大宋天童禅院ニ居セシ時、浄老住持ノ時ハ、宵ハ二更ノ三点マデ坐禅シ、暁ハ四更ノ二点三点ヨリヲキテ坐禅ス。長老トモニ僧堂裏坐。一夜モ闕怠ナシ。其間衆僧多ク眠ル。長老巡行、睡眠スル僧ヲバ、或ハ拳ヲ以テ打、或ハクツヲヌヒデ打恥シメ、勤メテ覚睡。猶睡時ハ、行照堂ニ、打鐘、召ニ行者一燃ニ蠟燭一ナンドシテ、卒時ニ普説シテ云、……(58)」

すなわち、道元らは、宵は「二更ノ三点」（午後十一時頃）まで、また暁は「四更ノ二点三点」（午前二時半から三時頃）から起きて坐禅し、これに耐えられず睡眠する僧達はたたかれ、厳しく説教された有様が記述されているのである。このような道元の修行生活は、のちに永平寺において生かされたに違いない。

なお、日本への禅の伝来は、栄西、道元の他にも多くの日本人禅僧の入宋によるものでもあるが、中国人禅僧も多く日本に渡来しており、彼らのもたらした中国の教育・文化情報も見逃してはならないと言えよう。

おわりに

以上に述べてきたように、極東文化の「吹溜り」である日本は、大陸からまた朝鮮からたえず様々な文化を受容してきた。

わが国における比較教育学「先史」を考える場合、このような文化の受容という視点を決して見逃してはならないだろう。すなわち、西欧における比較教育学先史の第一段階は、主として「旅行記」に限定されているが、わが国における「先史」はより幅をもたせた考え方が必要であると思える。たとえば、百済からの渡来帰化人、鑑真に代表される来日中国人僧、日本人留学生等の比較教育学の発達に果たした役割は決して無視することはできないのである。したがって、比較教育学の最も早い先史の段階は、旅行記のみに限定せず、わが国にもたらされた「海外教育事情の摂取」という視点で、より広くこれを捉えることが適切だと考えられる。このような点を念頭に置きながら、少なくともわが国の古代から鎌倉時代に到るまでの比較教育学「先史」の特色を以下に掲げておきたい。

第一に、外国へ出かけて行った、また、外国から渡日してきた人物の動機については、少なくとも鎌倉時代までは、宗教的動機、学問的動機がきわめて濃厚に見られることである。しかしもちろん彼らは、外国の教育に関する「素人」であることに違いはない。すなわち、教育情報のみを求めて渡海することはなかったし、教育情報のみをわが国に伝えた者を見出すことはできない。しかも、海外教育情報の選択基準も、異国情調的なものが多く、かつ非体系的、断片的なものであることは言うまでもない。

しかし第二に、忘れてならないのは、わが国における海外教育文化事情の摂取は、つねに「教育借用」の視点ないし崩芽が内包されていることである。もちろん、ノアやエクスタインの使用した近代国家にみられる「教育借用」すなわち国家的規模での「採長補短」の考え方と異なるものであることは言うまでもない。しかし、大宝令の「学制」をはじめとし、最澄、空海、栄西、道元等の書物にみられるように、絶えず大陸の進んだ教育文化を日本に定着させようとする「教育借用」の視点はつねに見出されるのである。これらの教育借用は、いずれも全国的に見れば、わずかの改革に終ってはいるものの、わが国の比較教育学の発達を考える場合、決して見逃してはならない点であろう。

第三に、わが国にもたらされた海外教育文化の特徴は、儒仏二教に関するものが圧倒的に多いことである。先進国である中国の文化のうち、まず儒教に関するものが伝えられ、仏教公伝以降は仏教に関する教育文化が絶えずわが国にもたらされている。これは東アジア文化圏の特色でもあり、わが国の文化形成の上でも当然見落としてはならない点であると言えよう。

したがって第四に、海外から摂取された教育事情は、いわば高等教育機関の教育知識であり、初等教育や庶民の教育に関する知識は、きわめて少ないものであった。たとえば、仏教知識の普及について言えば、仏教自体が高度の学問体系であり、僧侶の養成機関である寺院そのものが高等教育機関であったのである。このことはまた、儒学をわが国にもたらした者についても同じことが言えるのである。

以上のように、本稿ではわが国の比較教育学の先史についてある程度の傾向は述べたつもりである。しかし、なかには重要な教育的記述について見落した資料も数多くあることと思うし、また思いもかけない誤謬を犯しているかもわからない。これらの点を御指摘いただき、さらに比較教育学先史研究をよりよきものとなし得れば幸いである。

なお、室町時代以降の「先史」研究については別の機会に考察したい。

注および引用参考文献

(1) Noah, H. J., and Eckstein, M. A., Toward a Science of Comparative Education, The Macmillan Company, 1969, pp. 8 - 82.

(2) Fraser, S. E., and Brickman, W. W., A History of International and Comparative Education; Nineteenth Century Documents, Gleville, Ill: Scott, Foresman and Company, 1968, p. 2.

(3) 二宮皓・石井均「日本の比較教育学の発達に関する研究」『広島大学教育学部紀要』第一部、第二五部、一九七六年。拙稿「日本における比較教育学」（沖原豊編著『比較教育学』有信堂、一九八一年所収）。

(4) 『法顕伝・宋雲行記』長沢和俊訳注、平凡社、一九七一年、二二八－二二九頁。

(5) 同右書、五頁。

(6) 同右書、九七頁。

(7) 同右書、二五〇頁。

(8) 同右書、二五二頁。

(9) 同右書、一八一頁。

(10) 同右書、一八九頁。

(11) 玄奘著、水谷真成訳『大唐西域記』平凡社、一九七一年、四四頁。

(12) 同右書、二二八－二二九頁。

(13) 義浄撰『南海寄帰内法伝』（『国訳一切経』中伝部十六下「南海寄帰内法伝」小野玄妙訳、宮林昭彦校訂、一一七頁）。

(14) 同右書、一二〇－一二五頁。

(15) 『続日本紀』1、直木孝次郎他訳注、平凡社、一九八六年、一四頁。

(16) 多賀宗隼著『栄西』吉川弘文館、昭和四〇年、七二頁。

(17) 家永三郎他監修『日本仏教史』Ⅱ、法蔵館、昭和四二年、五〇頁。

(18) 竹内照夫著『四書五経』平凡社、一九六五年。

(19) 司馬遷著、野口定男訳『史記』下、平凡社、昭和四六年、二五七頁。

(20) 同右書、上、二〇一－二六六頁。

(21) 班固撰、小竹武夫訳『漢書』上、中、下、筑摩書房、昭和五三－五四年。

(22) 『東アジア民族史』1・2、正史東夷伝、井上秀雄他訳注、平凡社、一九七四年、一九七六年。『騎馬民族史』1、正史北狄伝、内田吟風・田村実造他訳注、平凡社、昭和四六年。

(23) 『東アジア民族史』1（前掲書）、一三一頁。

(24) 同右書、一三一頁。

(25) 同右書、一六四頁。

(26) 同右書、一九一頁。

(27) 同右書、二〇五、二〇八頁。

(28) 同右書、二四九－二五〇頁。

(29) 同右書、二五五－二五六頁。

(30) 『騎馬民族史』1（前掲書）、二五二頁。

(31) 同右書、二七三頁。
(32) 『東アジア民族史』2（前掲書）、三六八頁。
(33) 『日本書紀』下、坂本太郎他校注、岩波書店、昭和四〇年、二八頁。
(34) 同右書、三四頁。
(35) 同右書、一〇四頁。
(36) 同右書、一〇八－一〇九頁。
(37) 村井康彦著『律令制の虚実』講談社、昭和五一年、二〇－二一頁。本節は、その視点の多くをこの書に依っている。
(38) 『東アジア民族史』1（前掲書）、三二六頁。
(39) 村井康彦、前掲書、四二－四四頁。
(40) 『東アジア民族史』2（前掲書）、三八二－三八三頁。
(41) 石川松太郎「古代国家と教育」『日本教育史』I講談社、昭和五一年、一四－一五頁。
(42) 同右論文、一五頁。
(43) 宮田俊彦著『吉備真備』吉川弘文館、昭和三六年、三九頁。
(44) 同右書、三九－四一頁。
(45) 石川松太郎、前掲論文、二〇頁。
(46) 『東アジア民族史』2（前掲書）、三七九頁。
(47) 同右書、三九六頁。
(48) 安藤更生著『鑑真和上』吉川弘文館、昭和四二年、二一八－二一九頁。
(49) 渡辺照宏編『最澄・空海集』筑摩書房、一九六九年、四七－四八頁。
(50) 『三教指帰・性霊集』渡辺照宏、宮坂宥勝校注、岩波書店、昭和四〇年、四二三頁。
(51) 二宮皓・石井均、前掲論文、三九－四〇頁。
(52) ライシャワー著、田村完誓訳『世界史上の円仁』実業之日本社、一九六三年。ライシャワーは、この著の他に円仁の『入唐求法巡礼行記』を英訳している。
(53) 円仁『入唐求法巡礼行記』1、足立喜六訳注、塩入良道補注、平凡社、一九七〇年、二〇〇頁。
(54) 同右書、三三〇頁。
(55) 多賀宗隼、前掲書、二五一頁。
(56) 明庵栄西「興禅護国論」柳田聖山校注。（市川白弦他編『中世禅家の思想』岩波書店、一九七二年、八〇－八二頁、所収。）
(57) 『正法眼蔵・正法眼蔵随聞記』西尾実他校注、岩波書店、昭和四〇年、二九一頁。
(58) 同右書、三七七－三七八頁。

昭和六十二年二月十八日受理